





芳川俊雄閣

其名も高橋
毒婦の小傳
東京奇聞

四編上

~14
2690
10



特
2690
10



よ
川俊楯園
そのお幼造
桜高府種点

高鮮串
考粹



櫻木の小詩篇を題して芳名を後世に留め夫の高徳忠士の
赤心是は高橋毒師の小傳同く四編を櫻木小鏡めて
其醜行と末代を殘る階珠を以て雀を弾くの嘆を手に
も何れねど書肆の需めに辞ざるを得て三編綴て一服と
烟草休むるを催促四編の序文を急ぐがまに島
鮮堂の店前で矢立の筆をかきおろして「自然校正成
むろくにしることを勿し時々誤謬をまきけりかあか」と書
付て与つるも亦店主への忠告にこそせ

明治十二年二月上旬

岡本紀泉題





高橋於傳

房州館山の船乗
石川甚三郎



○去程小舟の初めで舟心とありし
 松室と味方小舟に入其味方
 悪人ある室若和舟へ罪と甘きと
 今五十兩と奪ひし上りて田舎小
 舟付んや松室が勤め舟長二所に
 舟長へ出立し又何と云まんと
 舟長も松室も松室も同舟長の前
 の上は松室原田要る事とせし
 舟長の事を松室に云ふ松室悪し
 舟長は目撃しありし松室は松室
 て押さる子松室と松室は松室
 助と引つれ遠く舟長へ
 俣りつる

△了官所身成能治去舟方止宿
 △世が西も舟もあつたが
 悪人と探すと云はれり
 舟長は松室と出立りて
 舟長は松室と出立りて
 舟長は松室と出立りて
 舟長は松室と出立りて

△次

つぎ 波の助の病もか様の子どまう
 恨む病もあらね終日宿屋の裏二階に

寂しうおきてたり
 徒然と慰め兼
 次の間ふは終
 うら運る
 りせ



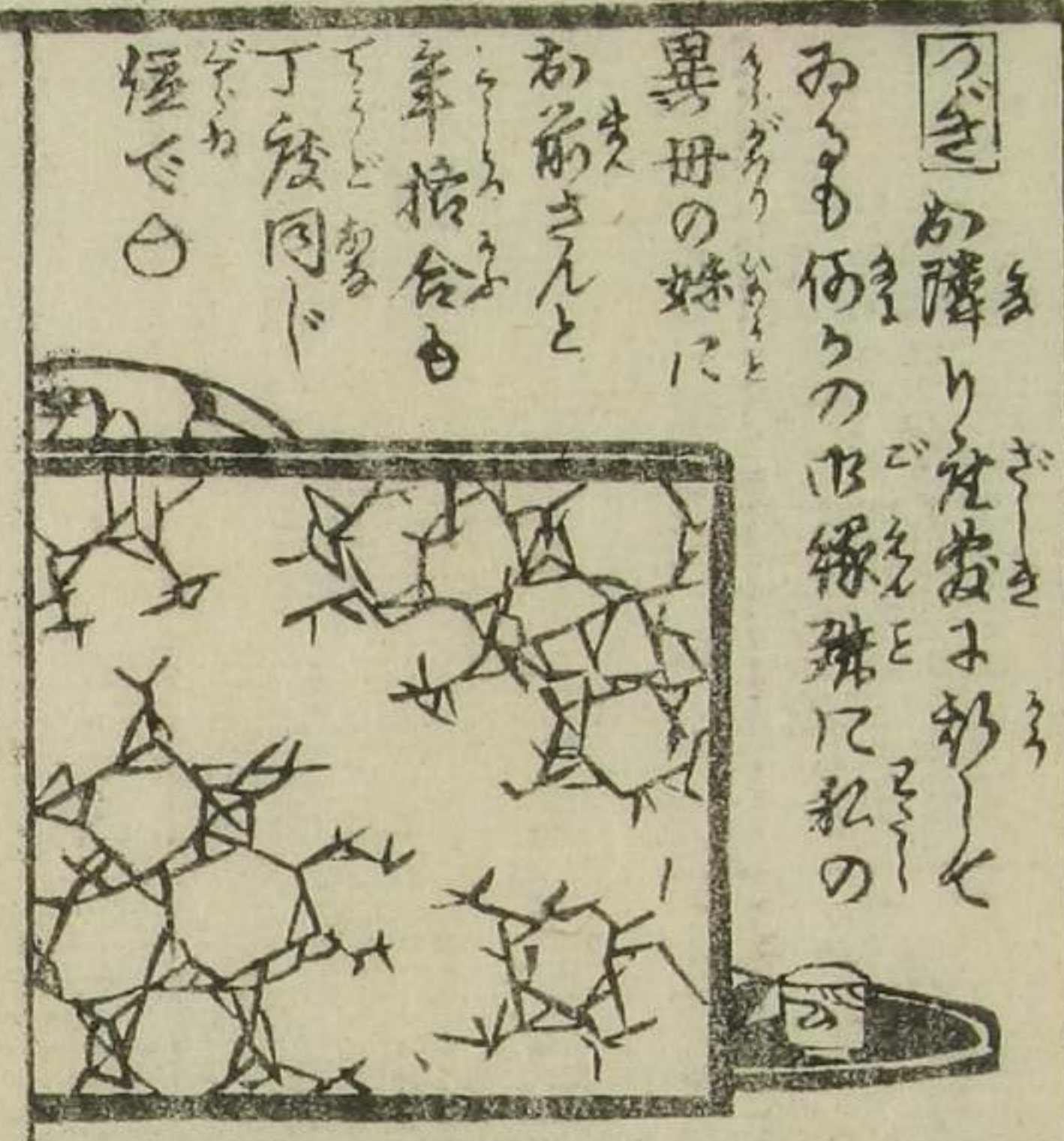
※中幸男は白ん
 加助が横濱小
 田のおく妻

おとせ
 止むとせしはてお宿
 夫婦の朝夕小旅と
 足合す
 止むとせしはてお宿
 夫婦の朝夕小旅と
 足合す



▲男と
 女と
 何れかえと
 舞ゆる小男の内山仙と女とて古巷土境
 の中突とて檢相丁辺に居るると千七八
 葉の丁人まて女へ青木かかひとて千四五の必

或田のことお兼の
 壁もろりの菓子を携
 さへ波とぬるりの所へ来
 り病気の様ふの同窓さめ
 こせ男の上まど守りしを恋
 情と女もは親切と嬉しく



つぎに隣り住むおつと
 めも何うの由縁殊に私
 異母の妹に
 お前さんと
 年拾合由
 丁度同ド
 怪で

名前由支張
 おんといふが有り
 ありなほ仔細あり
 私ハ十一の岡田舎々



始りとしてつけとむい程中々
 仕事の程小
 推量り何々
 通う様候
 小上るな
 医者の

場には使が不ふ多相ふと実ハ兼



此地へおきくは後傳りせせぬ
 何となく婦の甲うであらうか
 由水島人とお前の毒小
 小かひて
 藤治と
 おきせし
 小といひて
 おきしたとてあつて二人でも
 君の若と他んとお折して先方
 夫婦の中ふふとまて就切ふいふを

▲由事い知くはあれど影
 用由為く極ま
 藤治を名めふ

●一七在雨へぬろと家程多
 穢意あふく生由医共ふる

と白

次へ

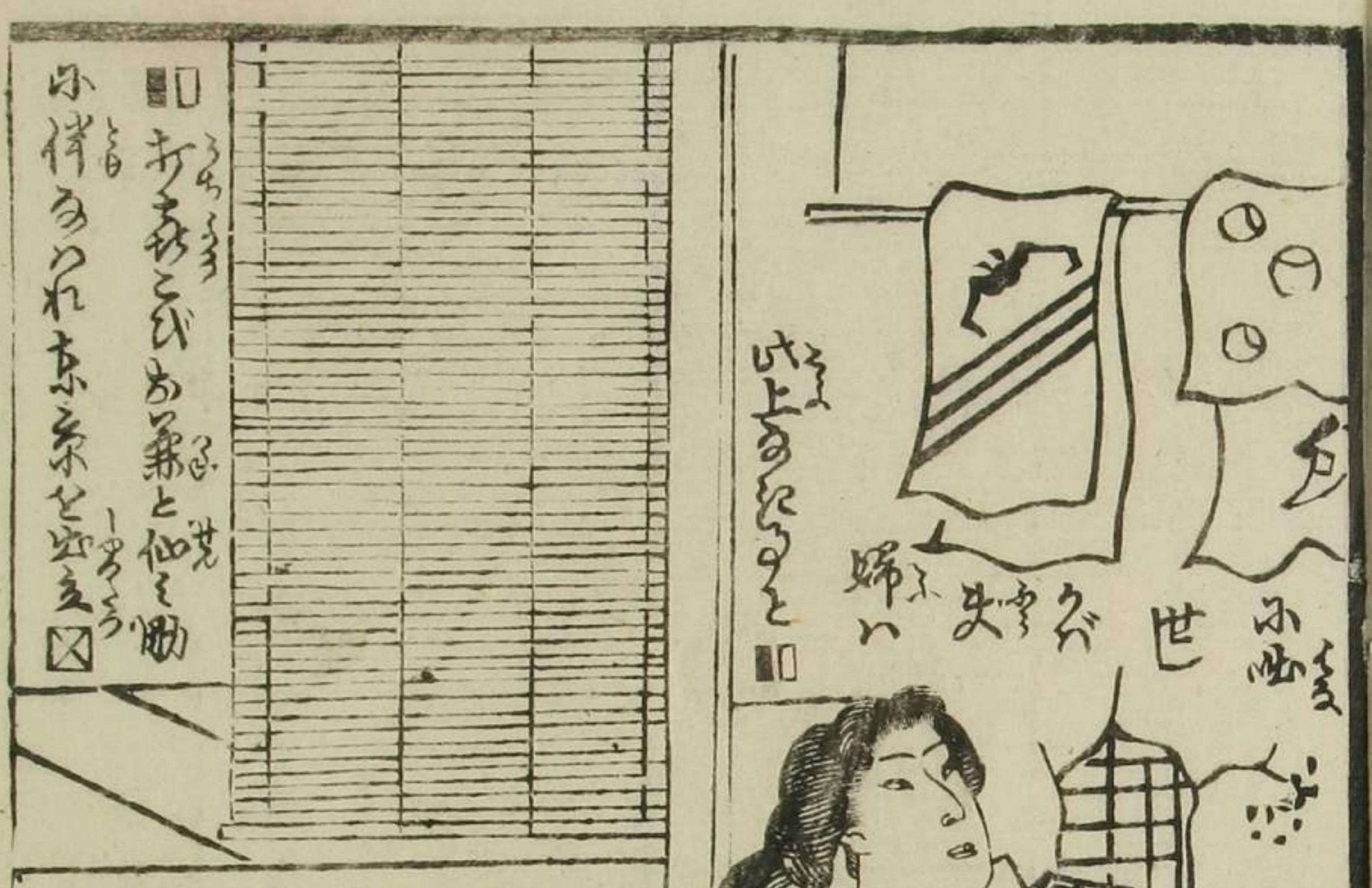


お傳
伴
同
世
る

お傳
子
の
お

お傳の
お傳の
お傳の
お傳の
お傳の

お傳の
お傳の
お傳の
お傳の
お傳の



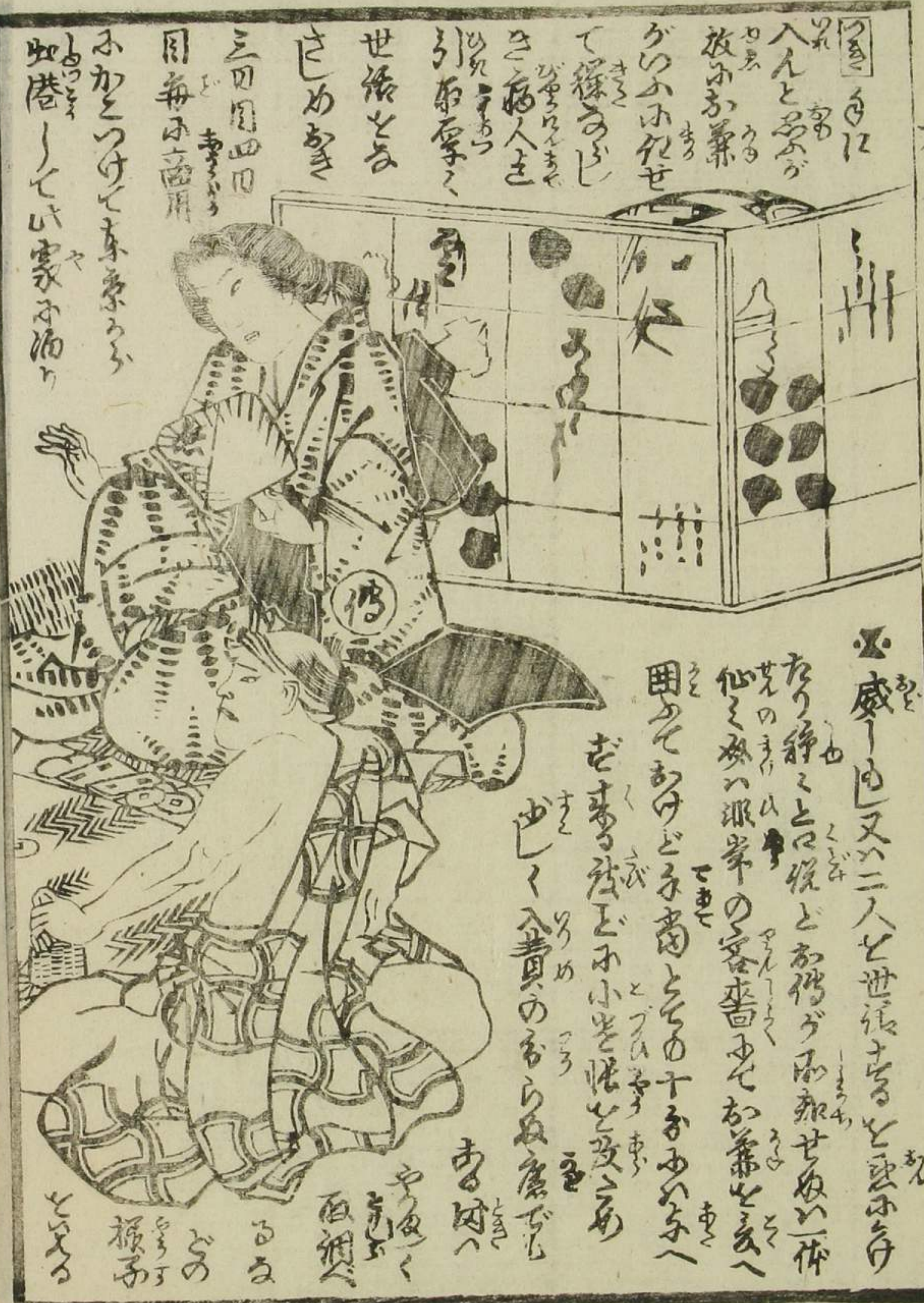
お傳
お傳
お傳

お傳
お傳
お傳



お傳の
お傳の
お傳の
お傳の
お傳の

お傳
お傳
お傳



つるに
入んとあふ
放ふお兼
がのふれせ
て縁あじ
さふ人ま
引お兼
世後とま
さめあま
三四月四日
月毎小高用
ふかといけとまあふ
お港しとけ家お酒り

必威しゆ又ハ二人と世後とまとあふ
たり静くと後とお傳が所お兼の
仙とぬの眼帯の客お兼とまへ
田あてあひとる商とまの十あふへ
お兼とまのふ小お兼とまの
お兼とまのふ小お兼とまの
お兼とまのふ小お兼とまの

あるは
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま



お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま

お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま
お兼とま

ついでとては後の伊りと共のてあもあうんと
 何あまもあ兼と姉と
 必はは親しとあて
 進々お驚とあ
 とあまうとあはと
 少しお仙のぬのああお後がら
 今お仙のぬのああお後がら
 ねておりまを世帯とあて
 かなおりあ何もいと進出
 くれんとまう
 種々あやを
 かまお徳が
 ああうれ中うらうま



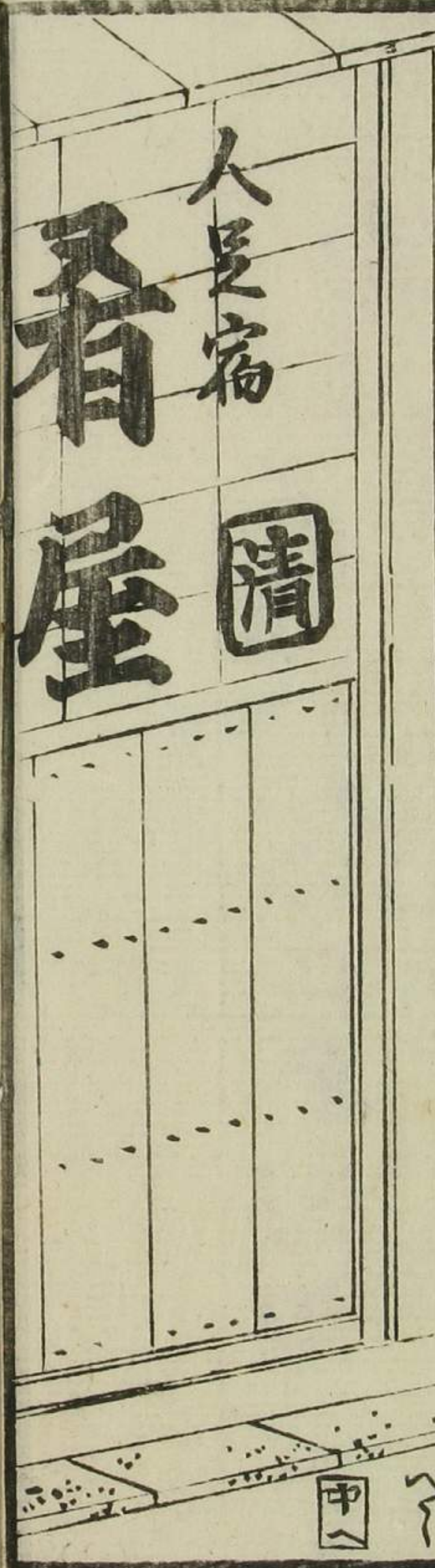
かかると厭いお兼の
 世帯を因不
 吉田町二丁目お人足
 痛を
 着を
 清は赤
 分へ引
 後りが
 お徳のおお孫
 細あうい何
 お兼とお後と
 改めあ
 英の一下るを二事

あお兼の二人へまの春
 ねおひ仙とぬが兼兼へはは
 すお兼お徳と帰へ仙とぬのあ兼と徳の
 進出はてああえ親と外へあ入とあま
 があはれどおのあ兼のうらけはははは
 とお兼お徳と手同あ兼と徳又お兼お徳
 かなお徳お徳とらええとあお兼お徳の
 足眼さま
 外
 小親お兼お徳又
 立ゆま



おの破は原風を仕切て
 病人のああ二備うひあを
 うああくと送ははははは
 へ石屋権かの人足や
 宿由定めぬ
 破戸が回々大勢入
 えんてお兼お徳と徳
 残てお兼お徳と徳
 次へ

諸事の務をいかに済むかの由を教へて
 出でしるの務利とめりてのまゝに
 今由まの残りあると云ふあれどま
 中か由まのねい頭と若の安利もく
 一か式申と後と貸付人など
 此のあゝ何ま由お夜とま
 姉世くとおさすおお夜へ
 田々か裁のりの利をせぬと頼りに
 幅と利一なる家か又内山仙とぬい
 甘くおめられてお茶と作らうと
 とまじりか遠く一対の怒りでお
 此の宿か色か後とまおひと
 種々か心と撥きごうか
 女とと波中か病人か
 世男へ對し並みア云ふ
 中へ



東京二區分繪圖全 鹿兒島紀事 六冊

命之養生善惡鏡全 島田郎梅雨日記 五編 大尾

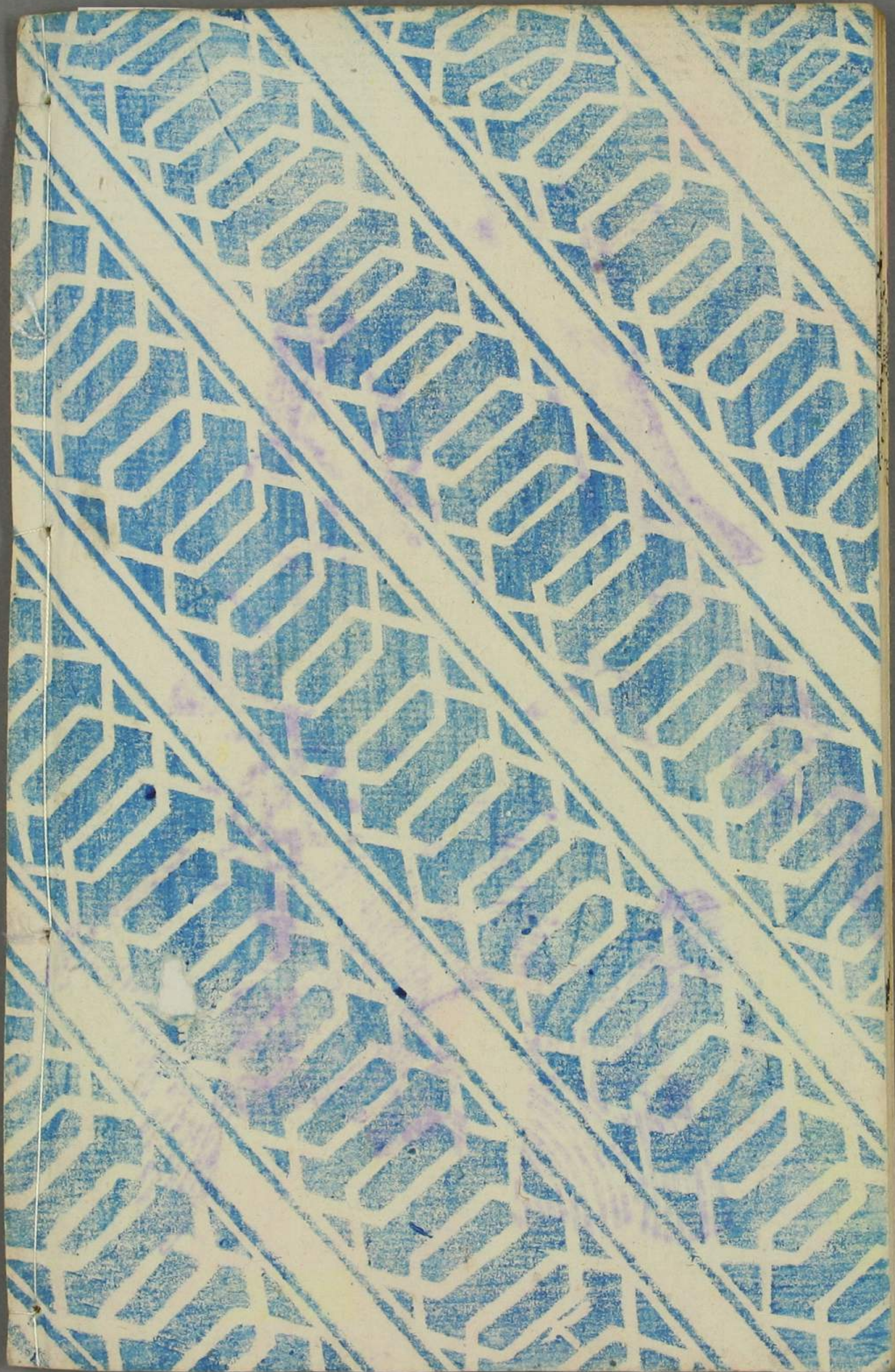
珍傳々都々 粉色入小本數品

御所櫻梅松録 十編 仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳四冊 新板双々 類品々

龜地水問屋 錦繪問屋 龜吉







~14
2690
11

中編四





高解中卷

高解の小傳

東原奇寫

四幅中卷

川園
とり中巻
川経画



上の巻よりつぎの巻とて由き男

まるとりけれの面白くは何う

何とあふんとて日だ懸る子交り

会津路入りのとけうる武雄の腰

き男あれどもけやうまの

エまの巧者さうり

あれは是々進するやどに

何とエまと馬じとて

少の弟の喜小仙合衆

合とあへて形じさ

武雄の男くも春辺で

年信あ

ひ甘い

く

も

物

た

なる

いふいとお
けさか首尾
よく成輪さす

六專口



○朝夕ハ多くの
人足ヲ入廻ンで強々
夜中用の内い時を早くお

お作
のお後が
まわると
けりおあえん
まんと仰し中

○お作日記

何よりお作
お作日記
お作日記
お作日記
お作日記



出でぬれず殊に淋し
お作日記
お作日記
お作日記
お作日記

お作日記
お作日記

お作日記
お作日記
お作日記
お作日記
お作日記

ある手子は何れ用にと尋ねれば僕一
 東京の老を肉山仙の助と云ふ人なり
 一今今又出港の時手付て肉山仙より
 此の水茶は東京の後若先生から
 戴たものと帝代又妙茶也
 早うか連合がお用
 おある様めあ
 との借と
 ありませと

一ツの小瓶を取出しお供い
 一急會録とて重親切と届けて
 くれこれとの一販あつてゆれと
 家と昔とをそとくお

一舟一面むらり色小ちり七回
 七夜の苦も小疲を果眼
 如く生月十八日の夕言小せ才
 一舟にて歳小果故り死去らば
 お供の密う小
 一舟が人の前と
 て乾候故と親れ
 親族のあぬ
 此大地を別
 一舟思ふと
 客をたんと美く
 のて実とあふ入



甲子の年八月十日の事
 夫よりお借い候之ぬお供い候と
 小とて其水茶と販せしお拍が
 之をそむ拍がよの事一舟小
 候か手候と様子の事
 船りくたつと
 酔くき新笑々
 舟一面小腫あう拍
 一舟後か筋むとを若一む
 茶の利一効一あんと
 侍甲斐あう苦悩の田
 一舟一強くあり虚空と
 つむ七類八例



一舟一強くあり虚空と
 つむ七類八例

仕事と佛とある姉の
 ちあるうと寺の世法を
 雨雲の支度万端
 と取そのひ
 生後
 一月おと



富屋の猪商人小待侍と
 の赤出あひくさうき面
 お侍の在りの様子を
 侍の茶屋へ侍ひて
 まるは波之ぬの福言と

侍の在りの様子を
 侍の茶屋へ侍ひて
 まるは波之ぬの福言と
 侍の在りの様子を
 侍の茶屋へ侍ひて
 まるは波之ぬの福言と

○日本たの儀
 水町の赤坂寺と
 只寺へ華ぶり戒名を
 良長居士と変て七思の
 供養をらんるるに
 海せーぐお僧由
 今の信女の花女は
 とあるうらまはま
 ひ世を道らんこと
 一月達ふおと途
 中かひて在り
 近づきある上冊



侍の在りの様子を
 侍の茶屋へ侍ひて
 まるは波之ぬの福言と
 侍の在りの様子を
 侍の茶屋へ侍ひて
 まるは波之ぬの福言と

つぎ 波と助の
悔とどの心を
脱の舞ハ二人の
仍弟と姉夕の
素とてあや
故波の女どが
亡まられ上
ふり一人は
ゆめるともを
量られが一旦は
破り記違へも安ん
おんふりくうん
ゆめるともを



▲まうて父九名弟の影の
海をふして下され
東まふは地お
形りますとは
ひんが伊長
種々おま
久辞おま
ら手
彼にお
ひまお
ひまお
ひまお
ひまお

如何もに私の撰む者と
どものか
ありけぬ一ふ
ひ奴と飲くと
んの内におま
日教もたふ
おびふはま
むきあせさ
おるるりと
あつとま
父と秋むき
おま今更一人
ハ何年牛



と何
より紙
色にお
とま
末にお
お進ま
くら人の
肉にお
おんのお
あつとま
と取てお
押床と



箱をひらきおれおれ
有ればバテると指りて探つてみるお
様の形おとまるものからそい様お

と下と区とさとの紙と開くや原ハツ
と致さうくお情の紙は青く書おとる
よう何まき六膝立車一モシお情
さんまへおが
秘飛はて
人西の今と
つげの舞美様
忘れおとぬ
去奉の
御毛と五の後
月いあれとも書情ふ

由和さんだ何とお情さん師い
のぞへあつと始終と波て
お情い
今更
色と
一
由る



事ううま
高月い梁田へ意く着川村又

つと



ついでに老を正

捕り置たる

生因小お上の件しと

受て恨とを返す事

あしと逃ちりる

あま

てかひさんまる君

これど今とあつての時は

ておべた款の事

ねんを念と晴正

慮の

慮の

宿りの信

小毒婦と

はに指と

は末の

奉を

知りて

あお橋と

日が暮る

は引取

は十月末

小伊を

を商利の



その

せしころが

あつと云

巧い小

給に俄

る色とあつと

すめ

己

方山の源

小とと

伊を来由んと

果

東

〇

保

保

保

保

保

保

保

保

保

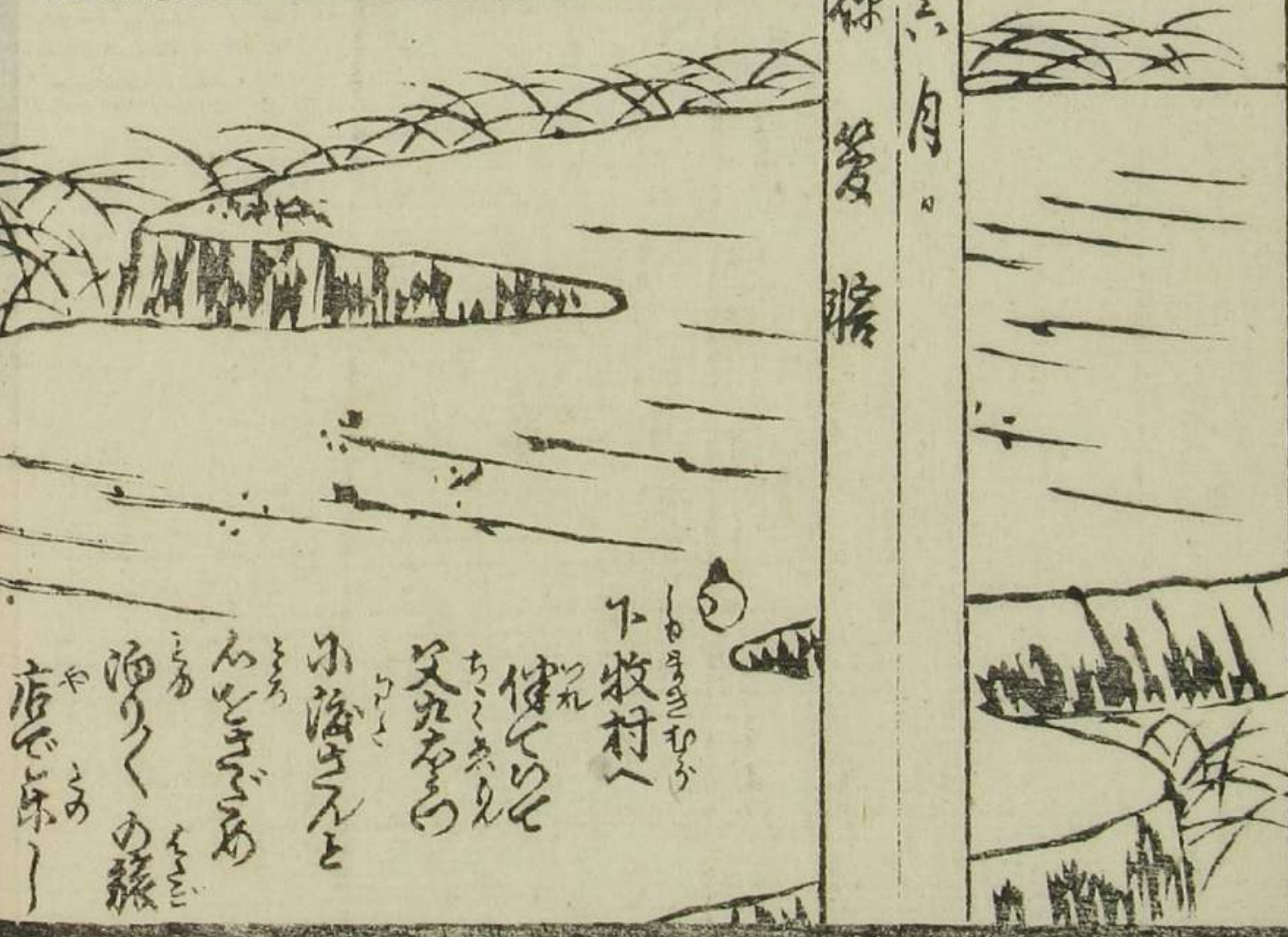
つぎ お傳と己が妻とのいはいはしるが傳小
 大考のち極め物と在散小のてと目と
 送りしが伊去来ある男小ありねが
 毒婦と長くねが
 てあふの送ゆはしる

の災害を招くことなるありとあは
 ありと切りまをるるをさされと
 俄くお用事の出事一様小面振り
 お傳とま小残一おれ一寸在更立夜
 全用事とじて遅くも来月又も

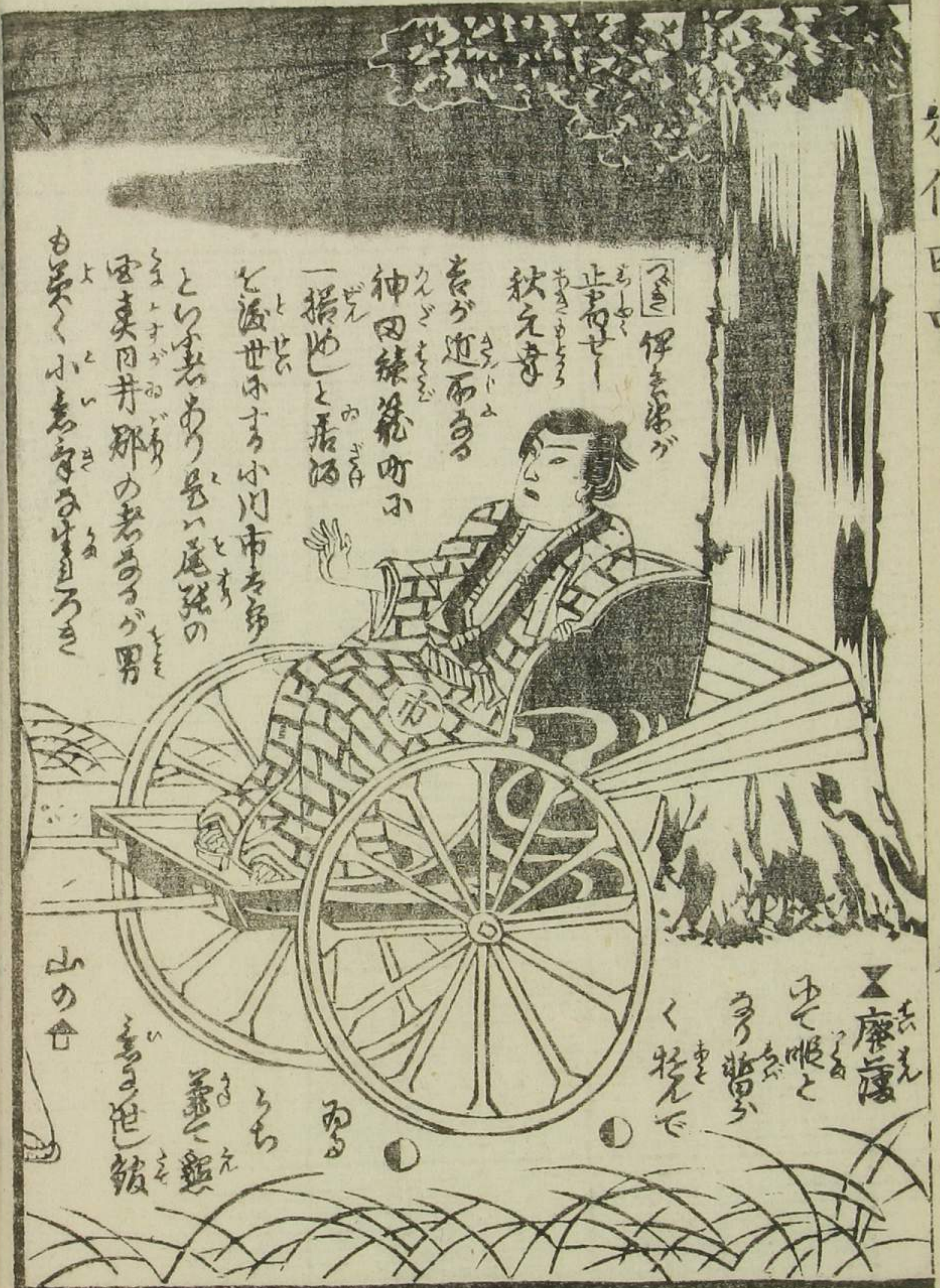
お傳とま小残一おれ一寸在更立夜
 全用事とじて遅くも来月又も
 小傳と毒婦のお傳り
 伊去来の人といふ

明治六年六月
 橋五郎 愛 橋

毒婦と長くねが
 てあふの送ゆはしる



○お傳と己が妻とのいはいはしるが傳小





東京一區分繪圖全

鹿兒島紀事

六冊

命之養生善惡鏡全

島田郎梅雨日記

五編 大尾

珍寶々部々一冊五編

粉色入小本數品

御所櫻梅松録 上編 仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊 新板 双二類品

龜地本問屋

製本區 番丁 七番地
 編輯人 岡本勸造
 浅草區 五町十二番地
 出版人 網島龜吉





櫻齋房種畫

岡本勘造撰

島鮮堂壽梓

四編下

14
2690
12



うし川 完

その本紙

きりなもろ橋
あけのし小傳

東京奇聞

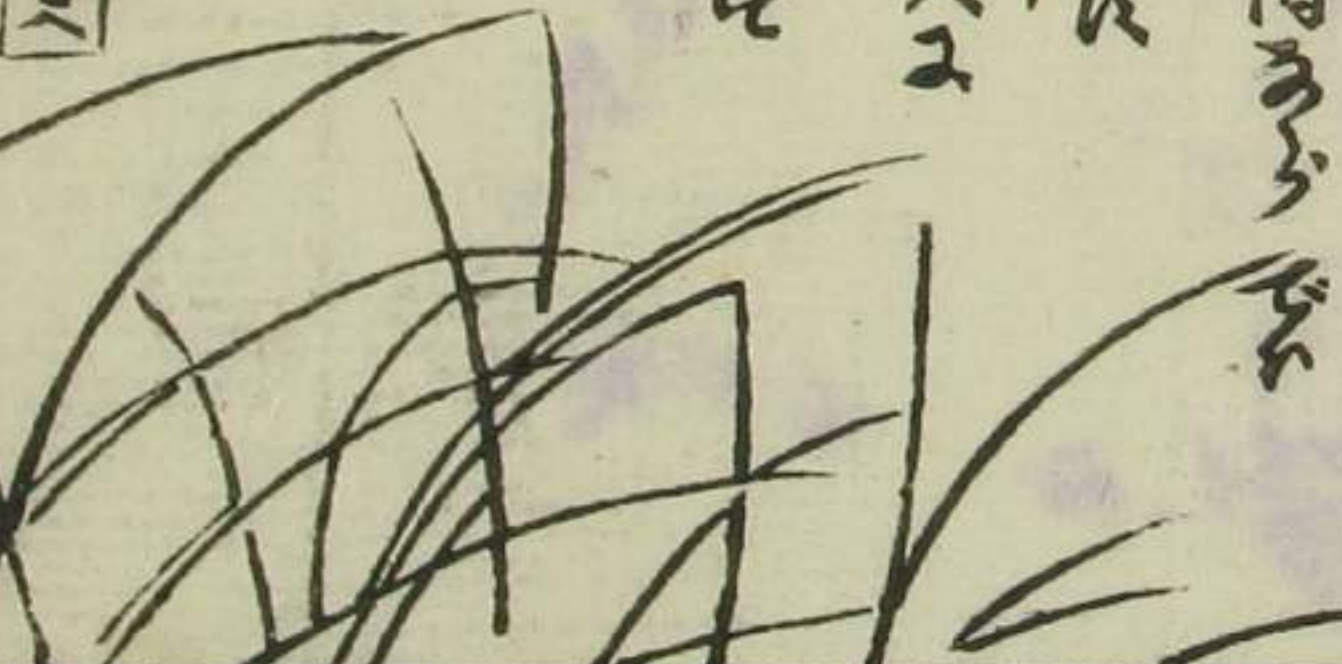
四巻の
下

扇種画

網子板



中巻の... 東京奇聞... 網子板... 扇種画... 四巻の下... 東京奇聞... 網子板... 扇種画... 四巻の下... 東京奇聞... 網子板... 扇種画... 四巻の下...



せんばあへと尋ねる敷とら
 女の子の癖いき西指ゆて
 たら作し方の市さへう度々育
 あいつこの口換投とするの
 全う物めくうの前でお目小
 かすほしといふ声き
 さへあつては懐い
 換子のもつと市
 不審なるり中
 ち糸が密の仔細を尋ねるに
 お借の頼り小涙を拭ひ固て下さ
 知つての通り細い文く家屋の
 伴ま果さん世活小のり香



途方ふ
 東より来る車
 あらうと近路とやとめ
 悪者とあらうす生車へ
 悪者
 加ふる幕を去合へる
 とく二人の悪者出で

在りし海の中の一雨小ゆけとて系
 と今日重花
 小出はて
 保書家
 らの狂歌
 縁いそがぬ枚
 藤の高くゆく油也よ
 中一の事うら且形の振立
 板を中とを出でつら
 昔ぬき貨放逆ららぬ
 中へしてあつてふうふふふ
 厚さあつと切の金と
 涙と有るを透おされ



来て車ま
 一雨は私を
 原原の中
 引ゆ
 何ぞ
 とき
 けと
 暴れ
 りをばて

お借い箱
と車と修さ
熱おれを引取
之め二十七回の内は

玉悪の共
逃るのみ

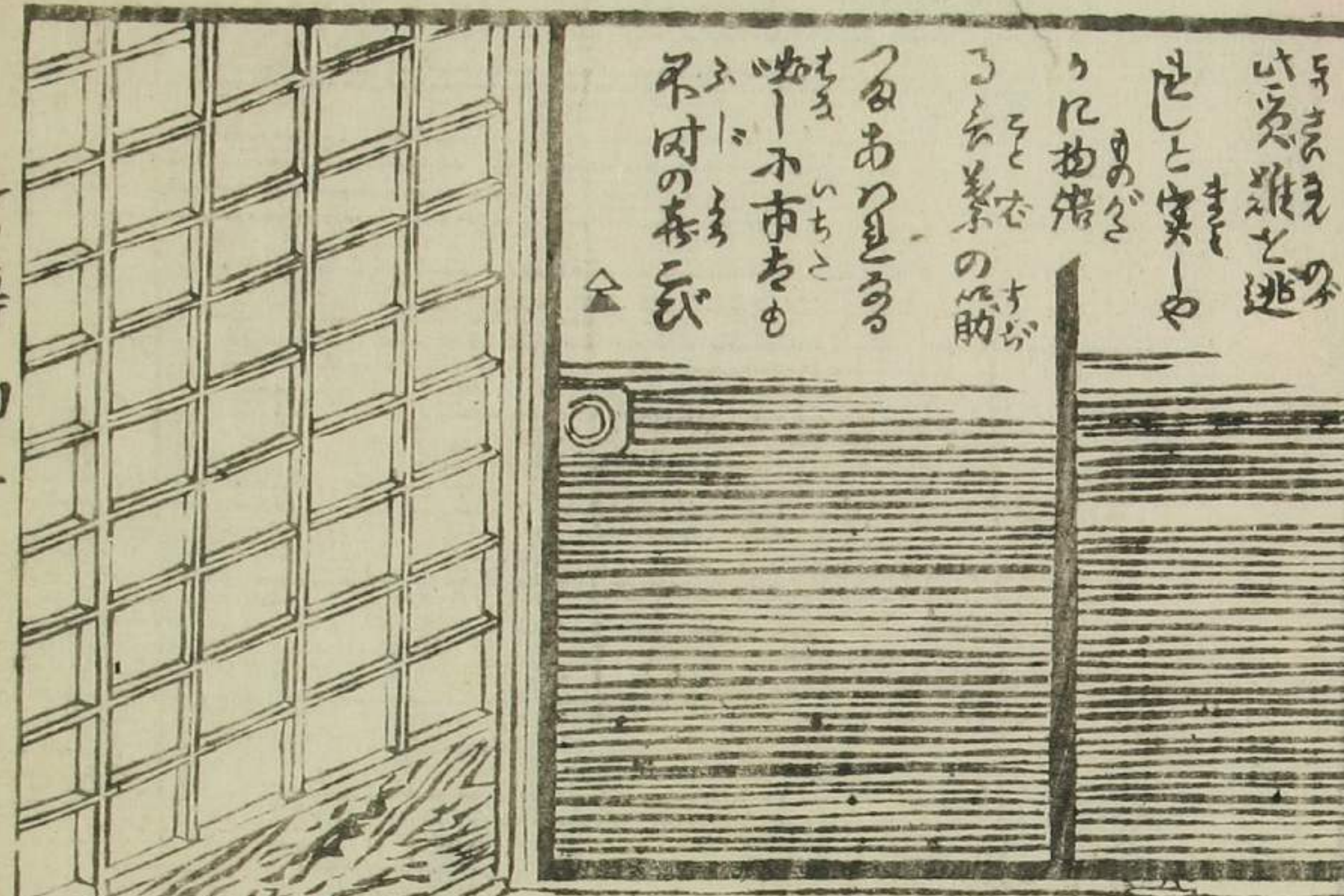
以資難と逃
世と笑や
うに物箱
るお糸の心助
つるあつらるる
ゆし市をの
不肉の春云



お借い箱
と車と修さ
熱おれを引取
之め二十七回の内は



○東屋久
おれが
おれが
おれが
おれが
おれが
おれが
おれが



△春由南
一雨糸糸
まを送つてあが
とさ音い二人糸
あるが車に掛けのせ
車と急がせたら
せる車の内の合意で
市をいお借が尋る
まに今日の夜路
のれおと吐せ



内小糸糸入係り連小お傳の
 後方止者せり市を帯り板指
 より小車と推せり大文在引
 返一彼鬼と買取て生田の

此の後の事などと傳ふは朝夕
 受と世者が鬼や南あはる節
 通一あは

お傳が若へ
 のん村守
 の移屋くとも

出ごさう
 一巻

心の中を尋ねて己が車小お傳とのせり
 東条へ送はるればお傳の暇市を帯り示し
 あつ世一如く且照と二不所在一仍て少少不都合
 ありお伝途を渡つて去る一も去再び是郡ぐどるまに
 遠る者と傳り先の縁人宿秋元
 昔方止者せり市を帯り板指
 より小車と推せり大文在引
 返一彼鬼と買取て生田の

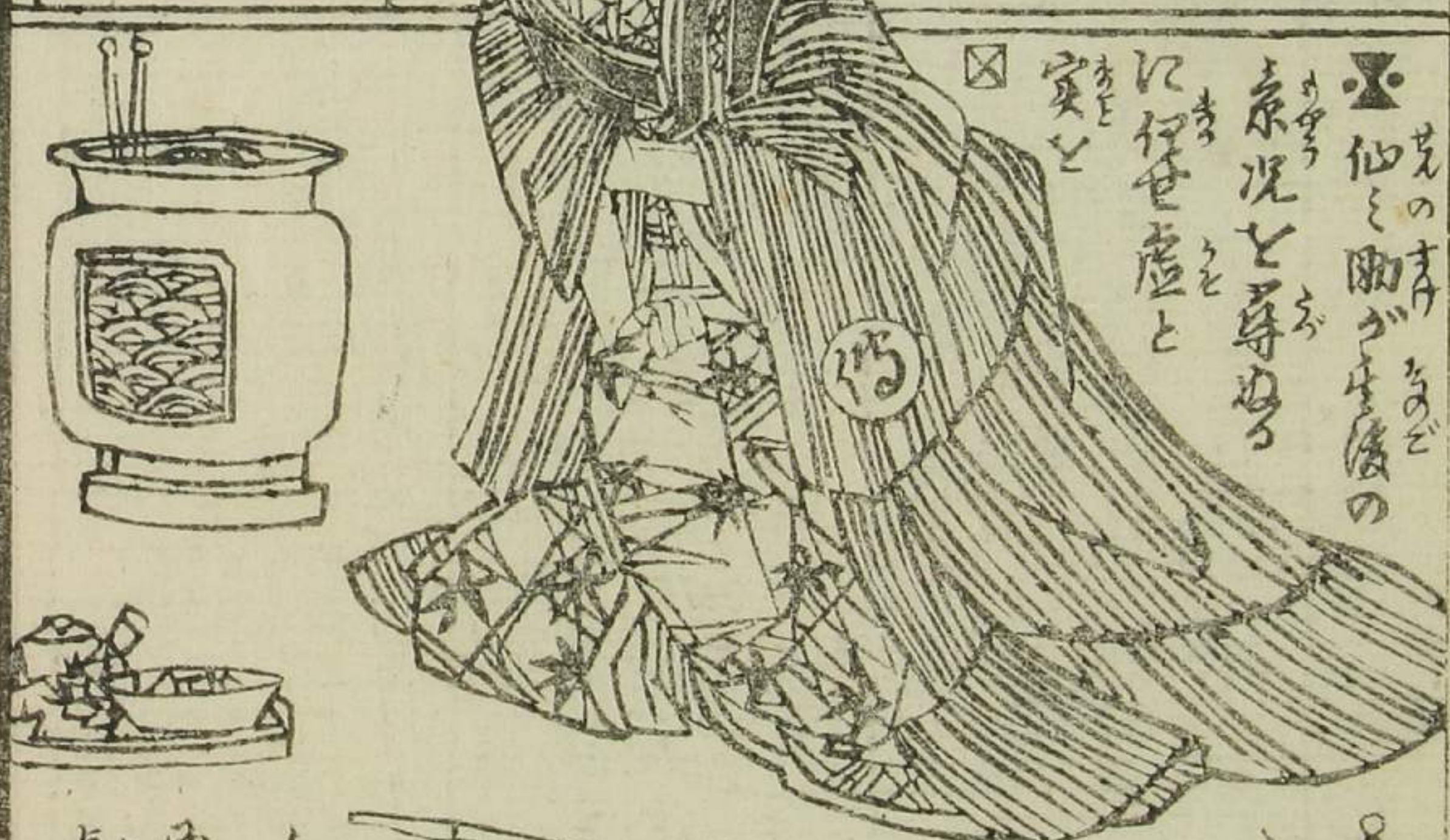
此の心の中を尋ねて己が車小お傳とのせり
 東条へ送はるればお傳の暇市を帯り示し
 あつ世一如く且照と二不所在一仍て少少不都合
 ありお伝途を渡つて去る一も去再び是郡ぐどるまに
 遠る者と傳り先の縁人宿秋元
 昔方止者せり市を帯り板指
 より小車と推せり大文在引
 返一彼鬼と買取て生田の

心の中を尋ねて己が車小お傳とのせり
 東条へ送はるればお傳の暇市を帯り示し
 あつ世一如く且照と二不所在一仍て少少不都合
 ありお伝途を渡つて去る一も去再び是郡ぐどるまに
 遠る者と傳り先の縁人宿秋元
 昔方止者せり市を帯り板指
 より小車と推せり大文在引
 返一彼鬼と買取て生田の

心の中を尋ねて己が車小お傳とのせり
 東条へ送はるればお傳の暇市を帯り示し
 あつ世一如く且照と二不所在一仍て少少不都合
 ありお伝途を渡つて去る一も去再び是郡ぐどるまに
 遠る者と傳り先の縁人宿秋元
 昔方止者せり市を帯り板指
 より小車と推せり大文在引
 返一彼鬼と買取て生田の

今もあつたがまのあま事にかと
 羨しきまらうるさ利を悔むは冷な
 き事あつたはあひもさるも跡を
 むりとあつたふゆゆと尋ねしあつた
 鬼の才面とちの徳方の市一出塔々
 ろり徳京の名市もて小川市を
 布が牡丹更紗のあつた
 手に入
 せうろ
 出らうあつたといふ別
 嬢が徳京に市あつた
 助けは是々のあつた
 屏けとといふと入るあつた

仙とあつたあつたの
 京況と尋ねる
 に任せと
 実と
 知り
 方あつた
 て悔と
 との
 相
 小
 梅
 子
 由
 徳



虚とあつたが仙とあつた
 耳底ふとあつたのあつた
 持あつたあつたあつた
 のあつた
 ね
 六あつた
 八あつた
 思もあつた
 事あつた
 丁あつた
 ろあつた

仙
 虚とあつたが仙とあつた
 耳底ふとあつたのあつた
 持あつたあつたあつた
 のあつた
 ね
 六あつた
 八あつた
 思もあつた
 事あつた
 丁あつた
 ろあつた

仙
 虚とあつたが仙とあつた
 耳底ふとあつたのあつた
 持あつたあつたあつた
 のあつた
 ね
 六あつた
 八あつた
 思もあつた
 事あつた
 丁あつた
 ろあつた



つぎ折角きふふ
 今この夢と共におも
 口惜しむれば終る
 まで續いておれ困
 つつ何の咄おこ
 せんといふ空め
 何うと云ふ場と
 只今夕止
 あり



◇ 何れを致入てと云うれ
 他もぬい由感せしう一向ゆるぬ
 驚りてしと私に葉と存け
 さしこ極よ毛は美人の○
 〇まの
 とゆく
 結に後後と
 いやとてが
 子医考の私由他
 何と知れぬがま

あつた
 殺して
 あつてま
 うらあ茶と
 口後んを
 由あつたの
 あつた

あつた
 殺して
 あつてま
 うらあ茶と
 口後んを
 由あつたの
 あつた

〇 見目士
 族体の老
 髪で居けて
 けされは酒屋の茶と
 岐の助の女せや
 移ゆて死させ
 毒茶の類あつた
 ぶしのため後後と
 室茶の何が
 起る心は
 お目おかつた
 意い後後の



〇 見目士
 族体の老
 髪で居けて
 けされは酒屋の茶と
 岐の助の女せや
 移ゆて死させ
 毒茶の類あつた
 ぶしのため後後と
 室茶の何が
 起る心は
 お目おかつた
 意い後後の

〇 まの
 とゆく
 結に後後と
 いやとてが
 子医考の私由他
 何と知れぬがま

あつた
 殺して
 あつてま
 うらあ茶と
 口後んを
 由あつたの
 あつた

あつた
 殺して
 あつてま
 うらあ茶と
 口後んを
 由あつたの
 あつた



共小
母へ
災害
とま
ぞり
故の



△是れおさんと佐木をばど
世もぬれぬとよふは方
うい生候ふ世が自独と
横怒の有振がお傳のたふ
あふれぬお仙とぬ
底味味

やあは
又南

入事市
のあてお傳

人
肉
枝
那
席

のりつてあるせ林く
ちと鬼うらうら
者法ふらせどらうと
お前那奴とあう
あふのぶ中々世は
が出来ねう

行に
又由
か
勝
と屯



上及下
右衛門
於傳
横濱

△是れおさんと佐木をばど
世もぬれぬとよふは方
うい生候ふ世が自独と
横怒の有振がお傳のたふ
あふれぬお仙とぬ
底味味

一所
那
の妻
宅
死
ら
あ
客
付
の
希

つぎ
 一袋もあひる
 ぬるふとほ
 ちちてまて
 新家の様どが
 花の夜さか



○百を身ひか
 酒杯と取や
 あらから市を
 新の夜さか
 ぬるふとほ
 ちちてまて
 新家の様どが
 花の夜さか
 とせんとして既お結ぶの
 家の業い
 只忙しい
 惚か落い
 せんとして既お結ぶの

あし合あり
 そうだう困ッ
 母の足あちち
 とあつて愛あ
 とつとつあ
 しつあつが
 けさの小さか
 困らさう
 マアあつて困
 あつて何しち免か
 妻とてうらうら
 一杯やうらうら
 とまう酒看と



石井甚之助
 あれこれい
 同巻
 武
 手渡小賣捌き
 仕法をや利巻の目算杯と

つぎ 云々を車と下り或 ○ 加者武殿不似をあれが己れと 逃にげのはたさるはた逃にげ出で

料りょうり店てんはくはく夕ゆふ坂さかのま交ま交まと 垂た引ひ捕とらえとああひひくくがが獲ときき 止とままをを傳たへたるる

色いろががららくくああるる夕ゆふ月つき後のち読よみみ終つるる 至いたるるああららううのの逃にげげるる事ことの

町まちのの横よこ道みちをを那な方かたへへゆゆくく あありり身みをを只ただ只ただ徳とく男おとこ引ひままてて某なにかの

止とままるる人ひとへへ救すくふふ 出でるるとと白しろ杖づえささじじててままるる実じつ母ぼのの服ふくをを

るるれれどどののりりぞぞや 座まんまされればば武ぶ殿てんとといいふふののああららいい振ふりりああや

内うち心こころのの伏ひひひふ 相あいいままりりととままををああててモモシシククとと呼よぶぶととむむ声こゑに

ままりり 仰おほいい方かたとと振ふりりかかへへるる事ことと

いい僕わがのの事ことととままりり月つきに 今いまははいいとと云いふふ

御ご届とどけけ明め治じ二に年ねん三さん月げつ四じふ日にち

芳川春海閣
其名も高橋
毒婦の伝
岡本起泉綴

東京奇聞 七編

御所楼梅松録 十五編 延出版

芳川春海閣
岡本起泉綴

島田一郎梅雨日記 五編

命養生善悪鏡 一折本

芳川春海閣
岡本起泉綴

白菅阿繁頼末 三編

單語圖解 一折本

太功記銘々傳 四冊

徳川年代鑑 一折本

龜地本問屋

勸町區吉番町六十番地
編輯人 岡本勘造
綾草區瓦町十二番地
出版人 網島龜吉



花の鳥

之

春輝の
小傳

東京奇聞

四編

芳川

信旗園

印

園本勘造撰

印

横高角種画

印

高鮮生輝

印



14
2690
10-12